

狭衣と若宮をめぐるって：
「預かり」と若宮即位への道筋

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1382

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



狭衣と若宮をめぐつて

——「預かり」と若宮即位への道筋——

倉 田 実

はじめに

「狭衣物語」には、多くの「養い親・養い子」の関係が認められるが、狭衣と女二の宮所生の若宮とは、実の親子でありながら、この関係性を強いられている点で特異である。このあややかな関係性は、狭衣と一品の宮の養女になっていた飛鳥井の姫君にも認められたが、若宮の場合⁽¹⁾は、密通の結果による出生であり、密通隠蔽をはかった女二の宮の母親皇太后宮の計略により、皇太后宮と嵯峨帝との子として認知されたことよっている。そして、嵯峨帝は、若宮を狭衣の「預かり」、すなわち「養い子」という形で後見させたことで、若宮は特異な立場に置かれることになる。狭衣と若宮は、嵯峨帝の意向に大きく作用されながら、その関係性は物語展開における要のような位置を占めていく。以下、この小論では、若宮の処遇のされ方として注意される「預かり」となる次第をたどりつつ、天照神の神託で予言された若宮即位への道筋を整理していきたい。「狭衣物語」の本文は集成本、「源氏物語」は新全集本を使用するが、表記を一部私に換えた。

一 若宮に関する年立

まず最初に説明の便宜のため、若宮に関する簡単な年立を提示しておきたい。狭衣と若宮の欄の数字は数えの年齢になる。事項欄に付したはアイウ…の符号は、以下の説明に用いることにしたい。

三	二	卷
四年 冬	二年 冬	年立
五年 夏	三年 春	狭衣
六年 夏?	秋	若宮
23歳	20歳	頁
22歳	2歳	事項
冬	1歳	
5歳	一八一	ア 一条宮で出生。皇太后宮、独詠
4歳	一九九	イ 若宮の声を狭衣は、出家した女二の宮の寝所で聞き、独詠
七八	二二三	ウ 五十日の祝で参内
一一五	二一九	エ 嵯峨帝、若宮を狭衣に預ける意向を関白に伝える
二〇	二二二	オ 嵯峨帝讓位、後一条帝即位
一五	二四三	カ 若宮、狭衣に懐く
狭衣、若宮を預かる		キ
狭衣、若宮に「笛竹」の相伝を仮託し、独詠		ク
一条宮で、狭衣と夕涼み。狭衣独詠		ケ
堀川関白邸で袴着。以後、関白邸に多く滞在		コ
後一条帝、若宮を預かる狭衣を羨み、嵯峨院は諫める		サ
女一の宮、後一条帝に入内		シ
女二の宮の法華八講で若宮も嵯峨野に		ス

四	九年	26歳	三〇六	セ	若宮世嗣問題
	夏		三〇九	ソ	中納言の典侍、若宮出生の秘密厳守を念じる
	秋		三一〇	タ	天照神の神託で、狭衣帝の次の次に即位が予言
	十年	27歳	三一八	チ	狭衣即位
	春	29歳	三三三	ツ	藤壺女御皇子出産により、世間は若宮の春宮位を危ぶむ
	秋	9歳	三三四	テ	一の宮の呼称。狭衣帝と贈答歌
	十二年	11歳	三四五	ト	元服し、兵部卿宮に
	春		三四八	ナ	兵部卿宮、嵯峨院に挨拶に訪れる
	秋		三五三	ニ	大納言室（今姫君）、姫を兵部卿宮にとの願い許されず
			三五五	ヌ	桐壺を曹司にする
			三六八	ネ	狭衣帝、嵯峨に行幸。兵部卿宮も滞在中

物語で提示される若宮のあり方は、以上のような概略をたどっているが、この年立を使用して「預かり」という制度的な面を補足しておきたい。

若宮は、天照神の神託（夕）によってその実父が狭衣であることを示唆されたが、人々は神託の意味が理解できず、出生の秘密は物語の終焉まで詮索されなかったようである。狭衣も我が子として世間に公表することは、しなかったようであり、生涯その秘密は漏らさなかつたと思われる。女二の宮や皇太后宮側では、乳母なども含めて自分達の秘事なので漏洩はあり得ず、事情を知っていた中納言の典侍は、自ら黙止する態度をとっている（ソ）。若宮出生の秘密は結局のところ保持されたのであり、物語の終焉まで嵯峨帝の実子とされていたことになる。狭衣と若宮がいかに親和的な関係を形成していようと、それはあくまでも擬制的親子関係なのである。

嵯峨帝は讓位を前にして若宮を狭衣の「預かり」とする意向を示し（エ）、その実現は卷三になつて確認される（キ）。

若宮は狭衣の養い子になったのであり、ここに実の親子でありながら、世間的には擬制的親子と見なされる関係が成立する。当時は、擬制的親子関係になっても同居は前提とされなかつたので、狭衣の住まいである関白邸ではなく、若宮は、嵯峨帝の意向によって一条宮に住み続けている。しかし、養い親のもとに住むのも自由であり、若宮の袴着は、堀川関白邸で盛大に行なわれたのは(コ)、狭衣の住まいであつたからである。袴着によって若宮を慈しむ気持のたかまつた関白夫妻が一条宮に帰そうとしなかつたと言われているが、それは、親子別居の現われとなる。しかし、袴着以後、若宮は関白邸に滞在することが多くなつていく。

擬制的親子関係が成立しても、実の親との関係は大事に維持されていたようである。若宮が狭衣の「預かり」となつても、親となる嵯峨院の意向は尊重されており、この点は、後に確認するが、「預かり」の解消もあり得た(セ)。帝からの「預かり」の場合は特にこの点が配慮されたのかも知れない。だから、嵯峨院は、若宮を狭衣の「預かり」にしても、実の親としての立場まで委譲したわけではなく、常にその処遇に関心を寄せている。若宮は狭衣の「預かり」となつてからも、事ある時には、父嵯峨院の住む嵯峨野に滞在している。例えば、女二の宮の法華八講に際して若宮も嵯峨野に滞在しているが(ス)、これは狭衣による実の母女二の宮との接触を配慮したのかも知れない。しかし、そうであつても父嵯峨院が住む嵯峨野であることによつて、若宮はそこに滞在していると理解できよう。元服後に兵部卿宮となり(ト)、挨拶に嵯峨院のもとに出かけているのもこの現われであろう。

巻四になつて狭衣は即位し(チ)、藤壺女御(宮の姫君)が皇子を出産するに及んで、世間の人々は若宮の春宮位を危ぶんでいるが(ツ)、そこでは次のようにされていた。

ツ 一品の宮の姫君の御事だに世の人は知らねば、ただこれをはじめたることと思ふに、「いみじくとも、若宮の御おほえは、今はいかにぞ。坊に居たまはむことも、さはいふとも、まことの当代今上一の宮をばおとしきこえたまはじ」など、まだしきに、聞きにくく定めきこえさするを、嵯峨の院には、「げに、いかが」と聞かせたまふぞをこがましき

や。

(卷四・三三三頁)

ここで藤壺所生の皇子に対して「まことの当代今上一の宮」というように、くどい言い方がされている。「まことの」は、ほんとの血縁の意であり、「当代今上」と疊語されるのは「今上一の宮」だけでは若宮になってしまふからである。「これをはじめたることと思ふ」とあるように、世間の人々は、狭衣帝の初子は藤壺の皇子と思うから、「まことの当代今上一の宮」と指示するのであり、若宮が狭衣帝の「一の宮」であると認識している現われなのである。だから、この世間の噂が語られて後に、若宮は「一の宮」と呼称されている(テ)。これは、擬制的親子関係が継続していて、実子とまったく変わらない待遇がされていることを意味するのであり、狭衣帝の本意でもあつたらう。藤壺所生の皇子は、したがって二の宮となつている。

若宮の物語から窺える「預かり」の形をとる擬制的親子関係として注意すべき特徴は以上のようにおさえられるが、次に嵯峨帝の意向に即してみていきたい。

二 嵯峨帝の意向と「預かり」となる次第

若宮の処遇に対しては、父親となる嵯峨帝の意向が大きくかわつており、この点の確認をここではすることになる。嵯峨帝は若宮の五十日の祝の時点ですでに狭衣に預けようかと思案している。本文引用部に付したアイウ…の符号は、先の年立のものを引き続き使用する。

ウ いとあはれなる私物におほしめすも、我が御世も今日明日とのみうしろめたくおほえさせたまふには、この御方様と見置かせたまふべきよすがもなく、心細き御有様なるを、「二の宮おほしおきてし有様にて、大将にうち具してもしたまはましかば、やがて譲らせたまひてまし」など、返す返す口惜しきことを嘆かせたまひて、「三の宮の御事をや

なほさやうにも言はまし」などぞ、懲りずまにおほし寄りける。

(卷二・二一三〜二一四頁)

嵯峨帝は御世の残り少なさや、後見のない若宮の「心細き御有様」を思うと、女二の宮が狭衣に降嫁していたならそのまま委譲したのにと仮想し残念に思っている。だから、出家した女二の宮に代わって、女三の宮を降嫁させ、若宮も預けようかと思案している。母方の故皇太后宮側にはしかるべき後見人が不在なのである。また、女一の宮は現在齋院であり、その処遇を決する事はできないので、嵯峨帝は三人の皇女のうち、今は女三の宮の行末が案じられてならないのである。そのうえ、若宮までが誕生しており、その処遇も決定しておかなければならない。この懸案を解決する方策として思案されたのが、「三の宮の御事をやなほさやうにも言はまし」であった。嵯峨帝があくまで狭衣に固執するのは、天稚御子降臨を引き起こした笛の技量を称えて、女二の宮をその禄として降嫁させようとした思いに遡源できる。嵯峨帝には、皇女の処遇に際して、狭衣が念頭に浮かんでしまうのである。

ウに示された嵯峨帝の思案は、讓位を前にして堀川関白に伝えられている。

エ「三の宮などこそいと心苦しきを、さ思ひそめし心ざしも侍り、なほ、大将に若宮をもろとも思ひうしろむべき様になむ預けむと思ひはべる。今より様ことなる生ひ先は、いとゆかしげなるを、何となき生孫王にて、いと寄せなからむ預けむと思ひはべる。今より様ことなる生ひ先は、いとゆかしげなるを、何となき生孫王にて、いと寄せなからむよりは、ただ我が物に思ひてものせよかし。思ふ心ことなめるひとり住みなめりとわづらはしけれど、そのうち心ざしをば知らず、かかる遺言を、さりとともことのほかには違へたまはじと、ひとへに頼むなり」などのたまはせて、

(卷二・二一九頁)

嵯峨帝は若宮の将来を「何となき生孫王にて、いと寄せなからむ」ものと見ている。ここは、ぱっとしない皇胤として、たいした後見もない状態で、の意であり、先の「心細き御有様」と同じである。嵯峨帝には、堀川関白女の中宮に皇子がおり、その帝位は予見できるが、若宮にはそれが無い。だから、嵯峨帝は、五十日の祝の時と同じように、狭衣に女三の宮もろとも「預けむ」としている。源氏物語の桐壺帝が、光源氏を「無品親王の外戚の寄せなきにては漂はさじ、わが御

世もいと定めなきを」(桐壺卷四一頁)と思案して臣籍降下させたように、若宮も臣籍に下そうとしている。

嵯峨帝は讓位後にすぐ出家し、そのために女三の宮降嫁は延引され、一条院崩御もあつて齋院と齋宮も交替することになる。女一の宮が齋院を退下して新たに源氏の宮が卜定され、女三の宮が齋宮となつたことで、降嫁はなくなつていく。それと同時に若宮が「預かり」となる件も留保されたことにならう。それを示すのが、次の部分になる。

カ 入道の宮は嵯峨にのみおはしまして、この若宮の御事もさらに知りきこえさせたまはねば、ただ三の宮ばかりぞあはれに思ひきこえさせたまへるを、秋にほか(潔齋所)へ渡らせたまひぬべければ、いと心苦しう、「かくては、いかでかおはしませむ。迎へたてまつりて、殿に預けたてまつりてむ」とのたまふを、堀川上「院はなほ、前齋院のひとり心細くて残りたまへるに、『同じくは、さてもやがてものしたまはむは、目やすかりなむかし』となむおほしたる」と聞こえたまへど、

(卷二・二四三頁)

一条宮に住む若宮は、女三の宮が齋宮の潔齋所に入ることになると、寂しくなりお気の毒なので、狭衣は「殿に預けたてまつりてむ」と母堀川上に相談している。これに対して、堀川上は、女三の宮に代わり退下した女一の宮の降嫁と若宮の後見という嵯峨院の意向を伝えている。若宮はまだ狭衣の「預かり」とはなつていないのである。また、懐いた若宮が愛しい我が子であるゆえに、狭衣を見こんだ嵯峨院の意向に振り回されることになる。嵯峨院は、女三の宮が無理になつたので、代わりに女一の宮をと思ふのであり、狭衣を念頭においたその方針に変更はない。

齋宮女三の宮が初齋院に入るに及んで、若宮は正式に狭衣の「預かり」となつてゐる。

キ まこと、齋宮は寮へ渡りたまひにしかば、若宮はいとど人づくなものさびしうてものしたまふを、大將は心苦しく思ひきこえたまへど、前齋院のひとり住みの心細きにより、嵯峨の院の、「なほ、さながら思ひ後見たまへ」とのたまはずれば、大殿へも渡しきこえたまはで、常にみづから渡りたまふ。夜なども、とまりたまふ夜な夜な多かり。若宮も見つきこえさせたまひて、いみじうまとはしきこえたまふを、いかでかはおろかには思ひきこえさせたまはむ。

やうやう住吉の里にもなりぬべかめり。

(卷三・一五頁)

嵯峨院の意向は、堀川上が語っていたように、以前と同じく「なほ、さながら思ひ後見たまへ」であつたが、狭衣は、女の宮降嫁の受諾はしていない。しかし、若宮を「預かり」たいのはやまやまなので、自身が一条宮に向くことをしている。これは、結婚の形ではない「後見」を実行しつつ、降嫁を延引させていることにならう。こうした形であつても、実質的に「預かり」としたことになる。この点は、次のように確認されている。

キ 月日の過ぐるままにめづらしきさまにおよすげたまふ若宮の御さまを、さすがによその物と見なしたまはず。かく契り深くて我が物に預かりたまへるをなどは、いかでかは世の常におほしなさん。「これよりほかの憂き世の慰めはあるまじかりける身にこそ」と、思ひ知られたまふ、あはれも悔しさも世の常ならず。

(卷三・一七頁)

狭衣は、若宮を「我が物に預かりたまへる」としている。女三の宮が初齋院に入るに及んで、若宮は正式に狭衣の「預かり」となっていたのである。だから、堀川邸での袴着を行うこともできたわけだが(コ)、しかし、その後男皇子のいない後一条帝側で若宮の処遇が取り沙汰されることになる。この点は、狭衣と若宮の即位への道筋と絡んでいくので、章を改めてさらに見ていきたい。

三 若宮即位への道筋

物語は、天照神の神託によつて狭衣の即位が実現するが、それと同時に若宮即位も神託されていた(夕)。若宮即位の道筋は、まず後一条帝の皇嗣不在という文脈のなかで、否定的な形だが現実の問題として浮上している。

サ 御年もやうやう三十に余らせたまふに、女宮たちだにおはしまさぬを明け暮れの御嘆きにて、「嵯峨の院の若宮をなごか預かりきこえざりけむ。ざりとも、大将の我が物に思ひきこえたるもうらやましく、げになかなかの國王よりは

めでたき人のよすがとなりたまへる、げにいとあらまほしけれど。みづからの有様もただ人にて見るは、いと心苦しうあたらしき心地するに、また同じさまにて立ち添ひたまへらむよりは」などのたまはせけるを、嵯峨の院にも聞かせたまひて、「齋院の御扱ひにとおほしてこそ譲りきこえしか。その本意だがひにしかば、今はげにさらでもありぬべかりしかど、いづれの御ためにもありがたき心のほどを、今はと改めむも軽々しきやうにぞありぬべき。いで、されば、何事もたださるべきにこそあらめ。まして帝に居たまふべきにては、人のもてなしによりたまふべきにもあらず。さらで、なま宮腹にてうしろむる人なからむよりは、大将にまかせたらむにあしうもあらず」などぞのたまはせける。

(卷三・一四三—一四四頁)

後一条帝は、男皇子がいないゆえに、若宮に注目している。現在いる男皇子は、嵯峨院一の宮の春宮だけである。若宮は狭衣の養い子として臣籍に降下しているが、自身の養い子として春宮に立てたいと後一条帝は思うようになっていた。それが「また同じさまにて立ち添ひたまへらむよりは」になる。「同じさま」とは、臣下の狭衣と同じさまという意であり、若宮が「ただ人」でいるよりも、自分の元にいる方が将来の春宮位も望めてましであらうとしている。この思案は、実現可能であり、皇嗣不在の状況では最善の方策にもなる。しかし、嵯峨院がその方策を否定することによって後一条帝の望みは断たれている。引用部後半の嵯峨院の言葉は物語において重い意味を持つている。

嵯峨院は、これまでの経緯からして、齋院女一の宮との婚儀がない現在、「預かり」を解消しても構わないとの判断を一応下している。「預かり」は解消可能であったことになるが、それはすぐさま否定されている。狭衣の「いづれの御ためにもありがたき心のほど」を感じると、解消するのは軽々しく感じるのである。そして、皇位継承は「人のもてなしによりたまふべきにもあらず」と判断しており、人為でどうにかなるものではなく、神意に拠るものだとする。もし、若宮が後一条帝の養い子になったならば、嵯峨院一の宮の春宮が即位の後に立坊し、さらに帝位に就くことは予想される。物語では、一条院統と嵯峨院統での皇位の交替が読み取れるからである。また一方では、嵯峨院一の宮の春宮が帝位につき、男

皇子が誕生すれば、その春宮位は目に見えてくる。外祖父になるのは堀川閔白である。そうなれば若宮の立場はあやしくなる。だから、若宮を後一条帝の養い子にしたところで、帝位に就く運命が保証されるわけではないと判断するのである。そして、もし帝位が保証されなければ、「なま宮腹にてうしろむる人なからむよりは、大将にまかせたらむにあしうもあらじ」として、若宮は狭衣の「預かり」のままでもいいとの最終判断を下している。嵯峨院の最終判断は、こうした予見性に拠っていたことにもなるが、さらに巧んだかどうかは不明ながら、結果的に若宮を後一条帝の皇嗣候補者から除外することによって、その皇統を牽制するものであったと言えよう。

若宮世嗣問題は後一条帝に男皇子が誕生しないことが改めて問題にされるところで再燃していくが、ここに触れる前に、先の引用部から狭衣即位にかかわる点を確認しておきたい。

後一条帝は、狭衣を「なかなかの国王よりはめでたき人」と捉え、「(狭衣)みづからの有様もただ人にて見るは、いと心苦しうあたらしき心地」がするとしている。この部分に対して、集成本の頭注では、「帝の言葉の中に、こうした言辞の見えることは、物語の終り―巻四後半―に狭衣が帝位に即く事とかかわるものである」と指摘しているが、まさにその通りであろう。後一条帝の皇嗣不在とかかわって狭衣即位も示唆的に暗示される時点として注意されるのである。

狭衣自身は、女一の宮の処遇と後一条帝の後継問題を当面解決する方策として、女一の宮の後一条帝入内を提案し、それが実行に移されている(シ)。この方策は、女一の宮を慰める役目を負っていた若宮を自由にするものでもあり、狭衣にとつて若宮を自邸に引き取ることを可能にさせている。そして、結果的に女一の宮に男皇子が恵まれなかったことで、若宮世嗣問題は再燃する。次は後一条帝が堀川閔白に語る段である。

七 「命も宿世も尽きにたる心地のするを、知らず顔にてのみ過ぐして、この世を別れざらむことの、罪深う口惜しかるべきを、大将の預かりの若宮、ただ人になさむの本意深しと聞きしかど、襦袢にくくまれたまへる女帝に譲りおき、もしは、一世の源氏の位に即く例を尋ねて、年高うなりたまへるおほいまうちぎみの坊に居むよりは、あへなむとこ

そ思ふは、いかが。さのみ言ひつつ位を惜しむとも、限りの命の程は心にもかなふべきならぬを見る折に、なほ一日にても心のどかなるさまにもなりなまほしくなむ」とのたまはするを、いかがは、ふと、よきこと、としもおぼされむ。
(巻四・三〇七頁)

後一条帝が、「大将の預かりの若宮、ただ人になさむの本意深しと聞きしかど」と言っているのは、先のサの部分の指している。嵯峨院の意向の確認になるが、言いさした形になることで、暗に自身の皇嗣としたいことを述べてもいる。女一の宮は入内して中宮となり、女宮を生んでいるので、その女宮を「女帝」とする案や、堀川関白を皇籍に戻し即位させる案を言いつつ、若宮即位の可能性を探っているのである。「命も宿世も尽きにたる心地」がするという後一条帝の言葉は、後嗣問題の切実さを提示していよう。

関白は、この会見で若宮が後一条帝の皇嗣となる件を承知したことになる。「うちうちには、若宮の御宿世の、いとかたじけなかりけること、ともてかしづききこえさせたまふ」(巻四・三〇八頁)とあるのでこの点は確認される。伝え聞いた狭衣は、「あるまじきことかなと聞きたまへど、いかでか、さも聞こえたまはむ」(同)との反応を見せている。狭衣にとつては、「あるまじきこと」と思わざるを得ないが、それを口外することは絶対に許されない。「あるまじきこと」とする言辞は以下に繰り返し使用されることになる。

後一条帝の決断に対して、今度は嵯峨院の反対はない。「嵯峨の院にも、おほし離れにし方様のことなれど、なのめにもいかでかはおぼされむ」(巻四・三二二頁)とされ、嬉しく思っている。若宮の立場が確実に見えてきたからであり、先に反対した時点から物語では短くはない三年という時間の経過がある。我が子と信じる若宮の春宮位が目前になれば、狭衣への「預かり」は解消することなのであろう。なお、嵯峨院は、先にツとして引用した箇所になるが、狭衣即位後に藤壺所生の皇子が誕生し、若宮立坊を危ぶむ噂に対して、「嵯峨の院には、げに、いかがと聞かせたまふぞをがましきや」(巻四・三三三頁)とされ、同じ杞憂を感じている。嵯峨院のあり方として注意しておきたい。

物語は、狭衣の若宮「預かり」を解消して、後一条帝の皇嗣にする動きとなるが、天照神が神託という形で介入し、それを阻止する展開となる。

タ ①大将は、顔かたち、身の才よりはじめ、この世には過ぎて、ただ人にてある、かたじけなき宿世、有様なめるを、公の知りたまはであれば、世は悪しきなり。②若宮は、その次々にて、行末こそ知りたまはめ。親をただ人にて、帝に居たまはむことは、あるまじきことなり。さらでは、公の御ためいと悪しかりなむ。③やがて、一度に位を譲りたまひてば、御命も長くなりたまひなむ。このよしを夢のうちにもたびたび知らせたてまつれど、なほ心得たまはぬにや」
(巻四・三一頁)

天照神の神託は三点に押さえられよう。一つは狭衣の即位であり、その根拠は、先のサで確認した後一条帝の発想と同じく、その美質の確認である。狭衣即位は、現春宮の即位で当面問題はないはずであり、実現されなくていいことである。現春宮に皇嗣が誕生すれば、問題はまったく残らない。後一条帝の系統が断たれるだけであり、皇位継承を脅かすものではない。狭衣即位の問題は、狭衣に即して考えなければならぬが、一方では若宮の処遇に関して生じた事態にもなる。若宮即位が予言される所以である。

この予言は、二番目の神託になり、若宮の「その次々」の即位である。その理由は「親をただ人にて、帝に居たまはむことは、あるまじきことなり」である。若宮即位は皇統の秩序を乱すものであり、父を帝としない帝を誕生させることになる。それでは源氏物語の光源氏と冷泉帝になってしまふ。皇統の次第を誤つてならないことが神託されたのであり、これは、後一条帝の方針に対する批判でもあった。

三番目は後一条帝のすみやかな讓位と狭衣即位があれば、後一条帝の命は安泰であるとする。後一条帝にとっては嬉しい神託となろう。

天照神の神託は、計らずも若宮の「預かり」を継続させる働きをしている。後一条帝のすみやかな讓位と狭衣即位とが

実現されれば、若宮皇嗣問題は不問に付される。人々は、「若宮の御事をぞ、誰も心得ずあやしうおほしける」(巻四・三一二頁)とされ事の真相と神託の真意に気づかない。狭衣・現春宮・若宮の順に皇位継承されることに何の矛盾も感じない。今は狭衣の「預かり」として若宮が臣籍降下しているが、狭衣即位のあかつきには、その第一皇子としての待遇になろう。嵯峨院の子であるので、実父も養父も帝になり、何の問題もなくなる。天照神の神託は、狭衣を即位に導くことよって、若宮を狭衣の「預かり」として継続させる働きをしている。それよって即位も予言された若宮は、さらに隠された実父との擬制的親子関係を継続していく。この次第は、「狭衣物語」が新たに獲得した創造性として注意されるのである。

四 若宮即位の予祝性と源氏物語引用

若宮は天照神の神託よってその即位が予言されたが、実は、その出生の時点においてすでに即位は予祝されていた。ここで扱うのは、現実問題としての即位への道筋ではなく、示唆的暗示的な予祝性である。

不義の子として誕生した若宮に、偽りの母となつた皇太后宮は、次のように独詠していた。

ア 雲居まで生ひのほらなむ種まきし人も尋ねぬ峰の若松

(巻二・一八一頁)

この歌に込められた予祝性については、前稿⁽³⁾でも触れ、別稿⁽⁴⁾でも論じたので、そちらを参照願いたいだが、集成本頭注が「雲居に届くまでも―帝位に即くまでに―ぐんぐん成長して昇りつめて欲しいものよ」と指摘していたことだけ確認しておきたい。若宮の予祝性をここでは狭衣側から捉えておきたい。

狭衣は若宮を出産してから女二の宮が出家したことを聞いて愕然とし、一条宮を訪れる。そして、寝所に侵入するものの、その気配にいち早く気づいた女二の宮はその場を逃れ、狭衣は空しく退散することになる。その際に、「若宮の寝おび

れたまひて俄に泣き」はじめた声を聞いて次のように独詠していた。

イ 知らざりし葦の迷ひの鶴の音を雲の上にや聞きわたるべき

(巻二・一九九頁)

若宮を我が子として認知できず、嵯峨帝の皇子としてしまった後悔を詠んだものである。「知らざりし」とは我が子とは知らなかつた意であり、「葦の迷ひ」はこれ以前に用例はないようだが、女二の宮との密通を暗示している。「鶴の音」は、子供の声の例えとなる歌言葉であり、その縁語として「葦」と「雲の上」がある。「雲の上」は鶴が飛ぶところであるとともに、宮中も指示している。皇子として出生したので、若宮の居るところは「雲の上」である。鶴の鳴き声を「雲の上」に聞く意と、若宮の泣き声を「宮中」で聞く意を重ねている。総じては、不義の子として誕生した若宮を我が子としえない後悔が詠まれたと一応理解することが出来る。しかし、後悔の念とともに若宮の声を「雲の上」に聞くとするところに予祝性も認められるのではないかと思われる。光源氏は、藤壺が立后して参内する際に、藤壺への思いと、やはり我が子となしえない不義の子冷泉への思いを重ねて次のように独詠していた。

尽きもせぬ心の闇にくるかな雲居に人を見るにつけても

(紅葉賀卷三四八頁)

「心の闇」は、周知の歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集・雑一・一一〇二・兼輔)を引歌として、子への思いをいうことになるが、藤壺への満たされない思いも含まれよう。『細流抄』は「心の闇は若宮なり。雲井に人をは藤壺なり」と分けて考えているが、歌全体に両者が詠まれていると考えられる。藤壺は立后して参内しており、自分は「雲居に人を見る」ことになっている。藤壺は遠くの人になってしまったとの思いであるが、冷泉も我が子ではなく帝の子となるので同じである。

こうした点で、狭衣詠の引歌になっていると思われるが、光源氏詠にも予祝性は認められるようである。冷泉は、後に即位して冷泉帝となるが、「紅葉賀」巻ですでに桐壺帝がその事態を念じていた。冷泉は、文字通り「雲居の人(帝)」になっている。光源氏詠の「雲居に人を見る」は、慙愧の思いだが、すでに予言もあるので、将来の帝位が暗に予祝され

ていたと取れる。狭衣詠の「雲の上にや聞きわたるべき」も同じ事情が指摘できよう。「紅葉賀」巻は不義の子の誕生を主題化していたが、「狭衣物語」は若宮の五十日の祝の段で、大きくその主題性と表現とを引用している。この次第は先の別稿で扱ったが、冷泉帝即位を自明のこととして出発している「狭衣物語」において、狭衣詠は光源氏詠を引用することで、若宮即位も暗に予祝していたと言えるのである。天照神の神託で示された若宮即位の予言は、その出生時からの道筋の実現でもあった。

むすび

以上、若宮造型の特徴となる「預かり」となる次第と、帝位への道筋をたどってきた。若宮造型の始発において、「紅葉賀」巻が引用されたことで冷泉帝の位相を獲得していたことになるが、狭衣が我が子でありながら「預かり」となることで、冷泉帝のあり方を異化していたとも言えよう。ここに、この物語独自の創造性を認めることが出来るのである。

注

- (1) 拙稿「飛鳥井の姫君の位置づけ」(『大妻国文』31、二〇〇〇年三月)
- (2) 当時の養子関係については、本学大学院研究生の村田郁恵氏「源氏物語の『養い親・養い子』」(『古代中世文学論考』第六集、新典社、二〇〇二年五月刊行予定)に詳しい。
- (3) 拙稿「狭衣という人」(『狭衣の恋』翰林書房、一九九九年一月)
- (4) 拙稿「狭衣物語の若宮をめぐる――『源氏物語』引用からの創造」(『論叢狭衣物語3引用と想像力』新典社、二〇〇二年五月刊行予定)